

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520847

研究課題名(和文) 硫黄流通からみた古代・中世の日本とアジア

研究課題名(英文) Ancient / Medieval Japan and Asia from the Perspective of Sulfur Trade

研究代表者

山内 晋次 (YAMAUCHI, Shinji)

神戸女子大学・文学部・教授

研究者番号：20403024

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、10～16世紀頃のアジアにおける、火薬原料としての硫黄の国際的な流通構造の推移を、日本産の硫黄も含めて、全体的に考察することをねらいとした。

その結果、10～13世紀頃のアジアにおいては、当時世界で唯一、火薬・火器技術を保持していた中国に向けて、その原料としての硫黄が一極集中的に流れ込んでいく、という国際的な流通構造がみられたことが明らかになった。

そして、続く14～16世紀頃になると、中国による火薬・火器技術の独占が崩れ、アジア各地にその技術が伝播したことに伴い、中国も含めた複数の地域を流入の核とする多極的な国際流通へと、大きく構造が変化したことがわかった。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this study is to consider globally the historical change in trade patterns of sulfur, which is an indispensable ingredient of gunpowder, including Japanese sulfur, in 10th to 16th century Asia.

As a result, it became clear that there was the monopolar trade structure in which large amount of sulfur flowed from Asia into China, which monopolized gunpowder and firearms technology, during the 10th to the 13th centuries.

And during the 14th to the 16th centuries, the trade structure of sulfur largely changed from monopolar to multipolar one because of the breakdown of the monopoly of firearms technology by China and the spread of that technology to some parts of Asia.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：硫黄 硫黄の道 火薬 火器 朝鮮 琉球 宋 明

### 1. 研究開始当初の背景

近年の日本古代・中世史研究においては、国際交流史・海域史分野の研究が大きく進展している。しかし、このような分野全体としての研究の盛りあがり一方で、そのテーマの重要性が十分に予見されるにもかかわらず、ほとんど手つかずの状態で見捨てられている、国際交流史・海域史関連の問題も数多く見られる。

研究代表者はこれまで、日本古代・中世の国際交流史・海域史研究の一環として日宋貿易史の研究を進めてきたが、その研究成果のひとつとして、10世紀末～11世紀初頭の日宋貿易の開始とともに、日本列島で産出された硫黄が宋代の中国に大量に輸出され、その硫黄が中国でもおもに火薬原料として利用されていたことを、本研究課題の採択以前に明らかにしていた。

この日宋貿易における硫黄輸出の問題について研究を進めていく過程で、従来の日本史・アジア史研究においては、鉄砲・大砲などの火器の国際的な技術交流に関する研究がかなり蓄積されている一方で、火器にとって不可欠な火薬の原料である硝石や硫黄の国際的な流通状況についてはほとんど解明されていないことに気づいた。

そして、この火薬原料としての硫黄の国際流通の問題こそまさに、日本史だけでなく、アジア史・世界史における軍事史や貿易史などの重要な問題と不可分にリンクするにもかかわらず、いまだ十分な検討が加えられないままにとり残されている重要な研究テーマのひとつである、と考えるに至った。

そこで、日本史において日宋貿易・日元貿易・日明貿易がおこなわれた時期にあたる10～16世紀頃に関して、日本列島産硫黄の輸出も含めて、汎アジア的な視野のもとに火薬原料としての硫黄の国際的な流通構造の歴史の変遷を明らかにすることを企図し、本研究を計画した。

### 2. 研究の目的

本研究では、10～16世紀という長期的な歴史スパンのもとで、火薬原料として使用された硫黄の国際的な流通状況を日本列島産の硫黄も含めて汎アジア的に検討することにより、その流通構造の歴史的な変遷を明らかにすることを最大の目的とした。

そして、その硫黄の国際的な流通構造のなかで日本列島産の硫黄や日本という地域が果たした歴史的な役割を解明することにより、とすれば一国的な視野・発想に陥りがちな日本史とアジア史・世界史との積極的な架橋を試みることを、さらなる目標として設定した。

### 3. 研究の方法

本研究では、基礎的な作業としてまず、10～16世紀頃のアジア各地の文献資料のなかに記録されている硫黄の産出や流通に関す

るデータを、できる限り網羅的に収集した。

このデータ収集にあたっては、日本・朝鮮・中国を中心とする東アジア地域については古文書や漢籍という一次資料を中心にデータを収集し、東南アジア・南アジア・西アジア地域については二次資料である研究文献を中心に情報を集めていった。

また、この作業と併行して、東アジア・東南アジア・南アジア・西アジア各地における火器の発達史に関するデータを、主として研究文献に拠りながら収集していった。

そして最終的に、以上の硫黄の産出・流通に関するデータと火器の発達に関するデータを統合することにより、10～16世紀頃のアジアにおける、火薬原料としての硫黄の国際的な流通構造の変遷と中国からアジア各地への火器技術の拡散状況との相関関係を検討するとともに、軍需物資としての硫黄の重要な供給元のひとつとして日本列島がアジア史のなかで果たした役割について考察をおこなった。

また、以上のような文献学的研究以外に、日本国内およびアジア各地の硫黄鉱山や貿易港の遺跡の現地調査をおこなうことにより、文献資料から得られたデータに対してさらに多角的な情報の補足をおこなった。

### 4. 研究成果

本研究を通じて、10～16世紀頃のアジアにおいては、日本列島産の硫黄も含めて、おおそ以下のような硫黄の国際的な流通構造の変遷がみられたことが明らかになった。

まず、10～13世紀頃のアジアにおいては、中国王朝（北宋・南宋）が火薬・火器技術をほぼ独占していた。しかし、この当時の中国王朝の領域では、火山がほとんど分布しないという自然条件の制約により、硫黄の産出がきわめて限られており、火薬の原料として不可欠な硫黄は、外国からの輸入に頼らざるをえなかった。そこで、火山国として硫黄を豊富に産出する日本も含めて、おもに海上貿易を通じて、アジア各地の硫黄が中国に一極集中的に流れ込むという国際的な流通構造がかたちづくられた。

ところが、続く14～16世紀頃になると、中国王朝による火薬・火器技術の独占が崩れ、朝鮮半島・東南アジア・南アジア・西アジアなどのアジア各地にその技術が伝播していった。そしてこのような動きにともない、火薬・火器を自前で生産するようになったアジア各地で、火薬の原料として不可欠な硫黄の需要が大量に発生してきた。このため、アジアにおける硫黄の国際的な流通構造も、13世紀ころまでの中国を中心とする一極集中型のものではなく、中国も含めた複数の地域を流入の核とする多極的な国際流通へと、大きく形態を変化させていくことになった。

このように、アジアにおける硫黄の国際的な流通構造は、14世紀頃を画期として大きく

変化していったが、この画期が生み出された歴史的な背景としてもっとも重要なのは、当時ユーラシア大陸を広範に支配したモンゴル帝国の存在であると推測される。この巨大な帝国がアジア各地で展開した征服戦争が契機となって火薬・火器技術が中国以外に拡散し、それとともに硫黄の国際的な流通構造も変化を余儀なくされていったものと考えられる。

以上のような、10～16世紀頃のアジアにおける火薬原料としての硫黄の国際的な流通構造のなかで、日本列島産の硫黄はほぼ一貫して重要な構成要素のひとつであったと推定される。この点に注目すると、汎アジア的な軍需物資の供給元として重要な役割を演じ続けた日本という、これまでの日本古代・中世史研究ではほとんど注目されてこなかった新たな歴史像が浮かびあがってくる。

本研究によって提示された以上のような見取図には、いまだ仮説の域にとどまる部分も多々ある。それらの実証が不十分な問題については、本研究の後継研究として新たに採択された2014～2017年度の研究課題においてさらに考察を深め、より精確な歴史的見取図を描いていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5件)

山内 晋次、近年博多港研究の新動向 以中国人居住区の形成を中心、浙江海洋文化与経済、査読無、6号、2013、1-8

山内 晋次、平氏と日宋貿易 通説的歴史像への疑問、神戸女子大学古典芸能研究センター紀要、査読無、6号、2012、68-82

山内 晋次、9～12世紀の日本とアジア 海域を往来するヒトの視点から、東アジア世界史研究センター年報、査読無、6号、2012、111-127

山内 晋次、硫黄流通からみた海域アジア史 日本史とアジア史をつなぐ、九州史学、査読無、160号、2011、35-47

山内 晋次、「東アジア史」再考 日本古代史研究の立場から、歴史評論、査読無、733号、2011、40-56

〔学会発表〕(計 11件)

山内 晋次、硫黄流通からみた海域アジア、木浦大学校島嶼文化研究院創立30周年・海域アジア史研究会創立20周年記念韓日シンポジウム「島と海から見た歴史」、2013/12/02、国立海洋文化財研究所(大韓民国・木浦市)

山内 晋次、「東アジア世界論」のみなおしのために 前近代を中心に、第44回北海道高等学校世界史研究大会、2013/08/09、札幌市教育文化会館

山内 晋次、硫黄流通からみた古代・中世の日本とアジア、神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会・2012年度春

季研究大会、2013/03/06、神奈川県立地球市民かながわプラザ

山内 晋次、硫黄流通からみた古代・中世の日本とアジア、大阪府高等学校社会(地歴・公民)科研究会・世界史講演会、2012/12/25、大阪府立高津高等学校

山内 晋次、日宋貿易と「硫黄の道」 日本史と世界史をつなぐ、奈良県歴史教育者協議会・2012年度前期研究会、2012/06/30、奈良市立中央図書館

山内 晋次、Global Distribution of Japanese Sulfur and World History from the 10th to the 15th Centuries、The 2nd Congress of the Asian Association of World Historians、2012/04/28、梨花女子大学校(大韓民国・ソウル)

山内 晋次、日宋・日元貿易からみた日本とアジア、国際学術研究会・国際的日本古代学の展開 交響する古代、2012/03/22、明治大学

山内 晋次、硫黄流通からみた古代・中世の日本とアジア、名古屋古代史研究会・名古屋歴史科学研究会合同例会、2012/02/19、愛知県青年会館

山内 晋次、9～12世紀の日本とアジア ヒトの移動の視点から、専修大学東アジア世界史研究センター・平成23年度公開講座「古代東アジアの国際情勢と人流」、2011/11/20、専修大学

山内 晋次、An Attempt of the World History from the Sulfur Perspective、20th Annual World History Association Conference、2011/07/08、首都師範大学(中華人民共和国・北京)

山内 晋次、日本史とアジア史の一接点 硫黄の国際交易を中心に、国際日本文化研究センター海外シンポジウム「江南文化と日本 - 資料・人的交流の再発掘 -」、2011/05/28、復旦大学日本研究中心(中華人民共和国・上海)

〔図書〕(計 5件)

山内 晋次、NHK出版、NHK さかのぼり日本史外交編9 平安・奈良 外交から貿易への大転換、2013、182

山内 晋次 他、東京大学出版会、東アジア海域に漕ぎだす1 海から見た歴史、2013、289

YAMAUCHI Shinji 他、Institute of Southeast Asian Studies、Offshore Asia: Maritime Interactions in Eastern Asia before Steamships、2013、112-129

山内 晋次 他、汲古書院、東アジア海域叢書11 寧波と博多、2012、5-36

山内 晋次 他、国際日本文化研究センター、上海シンポジウム2011 報告書：江南文化と日本 資料・人的交流の再発掘、2012、201-211

6 . 研究組織

(1)研究代表者

山内 晋次 (YAMAUCHI, Shinji)

神戸女子大学・文学部・教授

研究者番号：20403024